

トマスにおける神の恩寵と人間の功德の問題

井 上 淳

トマスは、『スノマ』II-I, 第1問題から第5問題において、人間の究極目的としての至福について論じている。第5問題において論じているのは、人間の至福の獲得についてである。そして、その第7項においては、「人が神から至福を獲得するために、何らかのよい行いが必要とされるか」¹⁾ という表題のもとに、人間の自然本性的はたらきが、至福の獲得のために、如何なる役割をはたし得るのが問題とされる。

人間の至福の獲得という観点から、神の恩寵と人間の本性 (*natura*) の関係が論じられているこの箇所は、トマスにおいて、被造物たる人間の本性と神の恩寵との関わりが如何なる仕方とらえられているのかを知る上で、重要であると思われる。

I

トマスは、第7項において、至福の獲得のために、人間の行いは何ら必要ではないとする異論を、三つあげている。

これらの異論は、神の全能の前に人間の如何なる行いも全く無力であり、人間の至福は全面的に神の権能によるものとするものである。従って、これらの異論は、絶対恩寵主義的な立場に基づく異論であると言える。人間の救いは、人間の如何なるはたらきによるものでもなく、全く神の恩寵によるものとされるのである。

しかるに、トマスは、この問題に対して、至福のためには、意志の正しさ (*rectitudo voluntatis*) が、人間に必要であるとする。

「意志の正しさとは、究極目的への意志のあるべき秩序に他ならない。形相の獲得のために質料の正しい態勢づけが必要とされるのと同様に、究極目的のためには、意志の正しさが必要とされるのである」²⁾。

すなわち、トマスによれば、質料が形相を獲得するためには、その形相を受け取る態勢 (*dispositio*) へと正しく秩序づけられていることが必要であるのと同様、人間の

究極目的である至福の獲得のためには、意志の正しい秩序づけという、至福を受けるための態勢が必要であるとされるのである³⁾。

さて、ここで問題となるのは、果たしてこの意志の正しさを持てば、必ず、人間は至福を獲得するのか、また、この意志の正しさは、人間の自然本性的能力の行使のみによって獲得し得るのかということである。

至福のために意志の正しさが人間に必要とされるとは言っても、人間の何らかのはたらきが、必ず、その人の至福の獲得に先行せねばならないとは限らないとトマスは言う。なぜなら、神は全能である。神は、もしそう望んだならば、目的に正しく向かう意志と、獲得される目的、即ち至福とを同時に造ることも出来たはずである。

またトマスは、人が意志の正しさを持った時、それを交換条件として、神が人間に至福を与えるのではないとする。或る人が至福を獲得するか否かは、全く神の御旨によるしかない。この点に関しては、トマスはあくまでも、絶対恩寵主義の立場に立つ。

以上のようなことにも拘らず、トマスが、人間が至福に達するためには意志の正しさが必要であるとするのはなぜか。この主張は、如何にして絶対恩寵主義と矛盾しないのであろうか。

II

トマスが、人間の至福の獲得のためには何らかの働きが必要であると主張する根拠は、どこにあるのか。そのことを理解するため、トマスが至福への到達の仕方を三通りに区別していることについて見てみよう。

第7項において、トマスは、アリストテレスの『天体論』から、次の言葉を引用している。

「完全なる善を持つべく生まれついた者のうち、或る者は運動なしにそれを有し、或る者は一度の運動でそれを有し、或る者は多数の運動でそれを有する」⁴⁾。

トマスはこれを、神と天使と人間の関係に対応させている。運動なしに完全なる善を有する者とは、その善を本性的に有している者にのみ適合し、そのような者とは唯一、神である。神のみが、至福のために先行する如何なるはたらきもなく、本質によって至福なのであり、また、神の至福こそが、被造物における、あらゆる至福の根源なのである⁵⁾。

神以外のあらゆる者は、至福へと向かうはたらきなしには、至福を獲得し得ないと

される。なぜなら、至福とは、あらゆる被造的本性を超越するものだからである。即ち、あらゆる被造物は、神とは異なり、本性的に至福を有するわけではない。至福は、その本性を超えて与えられるのである。

トマスが、至福の獲得のためには何らかの運動が必要であると主張する根拠はここにある。被造物たる人間や天使には、至福に向かって運動をすることが、必然的に要求されることになる。

至福の獲得のために、何らかの運動が必要であることは同様であるが、天使と人間とでは、その運動の仕方が異なる。天使たちはただ一度の運動で至福に達するが、人間の場合は複数回の運動で至福に達するとされる。それはなぜであろうか。

III

このことを理解するために、天使と人間の創造についてのトマスの論を見てみよう。あらゆる被造物のうち、天使と人間だけは理性を有し、至福に至り得る被造物として、他の被造物とは区別された仕方では創造されたとされている。

トマスは、第1部第62問題第3項において、天使たちの創造について述べている。そこにおいて、「天使たちは成聖の恩寵において創造された」⁶⁾とされる。成聖の恩寵 (*gratia gratum faciens*) とは、「それによって神へと結び付けられるところの恩寵」⁷⁾を意味する。即ち、至福へと到達せしめる恩寵が、「成聖の恩寵」と呼ばれるのである。

天使たちは、始めから直ちにこの成聖の恩寵において創造されたのであり、それ故にこそ、至福に値する功德のはたらきをなすことが出来たのであるとされる。成聖の恩寵において (*in gratia gratum faciente*) 創造されたということが、天使の創造の特徴である。

天使の至福のためには、神へと向かう運動が必要であった。しかし、その運動が可能であり、またその運動が、ただ一度で至福に値する程の運動であり得たのは、それをなすことを可能にする恩寵、即ち成聖の恩寵において創造されたものであったからである。

人間の創造について見てみよう。トマスは第1部95問題第1項において、最初の人間は恩寵において (*in gratia*) 創造されたとしている。人間も、恩寵において造られた。そして人間もまた、至福に至るためには、神へと向かう運動が必要とされる。人

間にとってのこの運動とは、トマスによれば、意志の正しさを持つこと、即ち、魂のあるべき態勢を整えることである。

ところが、人間の場合は、天使の場合と異なり、ただ一度の運動によって、至福なる者となるのではない。人間は天使のように、「成聖の恩寵において」創造されたとは言われず、「恩寵において」創造されたと言われている。人は天使と異なり、始めから直ちに成聖の恩寵において創造されているわけではないのである⁹⁾。

しかしながら、人間もまた、至福に達し得るものとして創造されているとされる⁹⁾。従って、人間もまた、成聖の恩寵にあずかり得る者であると言える。人間は、天使とは異なる仕方而至福に達するよう創造されているのである。トマスは次のように言っている。

「人間は、その自然本性上、天使におけるように、究極的完成を獲得するよう、いきなり生まれついているわけではない。その故に、人間に対しては、至福に値するに至るための、天使より長い道のりが与えられているのである」¹⁰⁾。

人間は時間的な存在者として、創造されている。トマスは、人間の至福のためには意志の正しさが、先行的にも (antecedenter)、併在的にも (concomitanter)、必要とされるとしている。併在的とは、天の国 (in patria) においてのことであり、至福となった者には意志の正しさが必然的に伴っているということを指す。それに対し、先行的に必要とされるというのは、この現世における人間のはたらきを指しているのである¹¹⁾。

人間の至福の獲得への運動は、この現世においてなされるものである。時間的に生きる者として造られた人間は、天使のような仕方而至福を獲得することは出来ない。人間は、功德と呼ばれるはたらきの数多くの運動によって、徐々に魂を整えていく。そして、このような時間的な過程において、至福を受けるに足る状態に自らを準備していくのである。

トマスは、神の恩寵と自然本性とを区別する。しかしながら、それらを全く切り離して捉えているのではない。自然本性的被造物は神の恩寵において (in gratia) 創造されたのである。「恩寵において」の創造とは、ただ天使と人間の創造のみだけでなく、あらゆる被造物の創造においても言えることであろう。しかるに、天使と人間、即ち、理性的被造物には、至福を獲得する可能性が与えられているのである。

IV

理性的被造物は、恩寵において、運動をなし、至福に値する功德をなすことが必要とされる。従って、功德とは、決して純粋な自然本性によるものではない。あらゆる功德は、恩寵によってなされ得るのである。

トマスは、第2部の1の序言において、人間は神の似姿たる者であり、自由決定力と自己のなす業に対する権能を有する者であると言っている¹²⁾。

しかしながら、人間がこのような本能力と権能を有する者として存在しているということは、トマスにおいて、決して神の恩寵と切り離されていないのである。神の恩寵と切り離された状態の人間がまず造られ、そこに恩寵が注がれるのではない。即ち、人間は、恩寵なしの、「純粋な被造物」(pura creatura)として存在しているわけではないのである¹³⁾。

人間は神の恩寵において在るものであり、そのあらゆるはたらきもまた、神の恩寵においてなされるとされていることに対しては、次のような疑問が生じてくるであろう。即ち、恩寵によるような運動が果たして自由意志による運動と言えるのか。神が自由意志をも動かすとするれば、天使や人間は結局、神の操り人形のような者なのであって、根本的には自由意志などないのではないか。こういった問題である。

しかしながら、トマスは、その様に捉えているわけではない。恩寵とは、天使や人間が自由意志によって功德をなすことを可能にするものなのであって、決して自由を束縛するものではない。むしろ、そのものの本性の完成に関わるのである。

功德的はたらきとは、恩寵のうちに在る者の、その恩寵への応答であると言うことができるであろう。恩寵への応答とは即ち、その者が神へと向かうことに他ならない。しかるに、神は人間の究極目的である¹⁴⁾。従って、神へと向かうことこそ、被造物にとっての本来的で正しい在り方なのであり、それによって、その本性は完成されていくのである。

自由意志が恩寵によって動かされるとは、即ち、神へと向かうべき本性を有する者が、神へと向かわせしめる恩寵によって、その恩寵に応答するように、動かされることである¹⁵⁾。それ故、この恩寵に正しく応答することによってこそ、天使や人間は、その本性の完成である至福を獲得することができるのである。逆に、この恩寵に対して正しい応答をしないことにより、天使や人間は罪に陥るのであり、痛み苦しみがそ

こにはある。それは、あるべき在り方に反することだからである¹⁶⁾。

このように、自然本性と神の恩寵とを切り離すことなく、自由意志を恩寵におけるものとして捉えることにより、トマスは自由意志の本質的なあり方を明らかにしているのである。

V

最後に、イエス・キリストの、人間の至福への関わりについてのトマスの論を、第7項の異論解答をもとにみてみよう。

トマスは、キリストこそが人間の救済の根源であり、キリストによってこそ、人間は至福に達することが可能になったのであるとする。第1部においてトマスは次のように言っている。

「至福に到達するためには、二つのものが、即ち自然と恩寵が必要とされる。至福の完成そのものは、世の終わりにおいてあるであろう。しかしながら、この成就是、自然に関する限りは事物の最初の設定において、また恩寵に関する限りはキリストの托身において、原因的な仕方で先在した¹⁷⁾。

トマスによると、神は、原初の創造において、神はそれぞれの種において完全なるものとして、最初の被造物を、それに先立つ被造物の如何なる様態やはたらきなしに、直ちに生み出された。神は、最初のそれぞれの種のもを、それをもとにして子孫が自然に繁殖していくように設定されたのである。即ち、最初に創造されたのは、それぞれの種における、最初の種子なのであり、そこに、その種における完全性が含まれていたとされるのである¹⁸⁾。

トマスは、人間の至福の最初の種子こそ、イエス・キリストであるとする。あらゆる至福者は、イエス・キリストから、いわば繁殖するのであり、人間の救済はキリストにおいて始まるのである。

「神であり人であるキリストを通して、至福は他の人々にもたらされる。それ故、受胎の始めから、キリストの魂は何らの先行する功德的はたらきもなしに至福だったのである¹⁹⁾。

キリストがこのようにあらゆる至福者の種子であるというところから、トマスは幼児洗礼の重要性にも言及して、キリストの功德は、洗礼を受けた子供たちが、彼ら自身は何の功德もないにもかかわらず、至福を獲得するのに役立つとしている。何故な

ら、洗礼によって人間はキリストに結ばれ、キリストの肢体となるからである²⁰⁾。

さて、ここで次のような疑問が生じる。即ち、人間はキリストによってのみ救済されるとすれば、キリスト以前に生きていた人々は如何にして救われ得るのであるか。

トマスは、キリストの功業はキリスト以前の人々にも及ぶとする。キリストは復活と昇天によって、時間空間的世界を超越して救済をもたらす。従って、キリスト以前の人々もまた、キリストによって救われるのである。トマスは第3部において、次のように言っている。

「たとえ、キリスト以前の者であらうとも、キリストの肢体となること以外には、如何なる人間も救われることが出来ない。……キリストの到来以前の人々は、キリストの将来における到来の信仰によって、キリストと合体していたのである」²¹⁾。

即ち、キリスト以前の人々は、来たるべき救い主への信仰によってキリストと結ばれていたとされる。このような至福は、「希望の至福」(beatitudo spei) と呼ばれる。これは、キリストによってもたらされる至福へと向かう運動の端緒である²²⁾。

ま と め

以上、我々は、『スソマ』Ⅱ—Ⅰ、第5問題第7項をもとに、トマスが、人間の至福の獲得における人間の自然本性と神の恩寵との関係を如何に捉えているのかをみた。

トマスは自由意志を恩寵のうちにあるものとし、恩寵のうち人間は、自由意志により救済への準備をなすのであるとする。人間は決して、神に操られる不自由な者なのではなく、自由意志によって神の恩寵に応答すべき者として捉えられている。人間は至福の獲得のために、複数回の功德的はたらきによって、至福を受けるに値する魂の態勢を整えなくてはならない。そのような魂の態勢は、トマスによれば、意志の正しさである。意志の正しさこそが、人間の神への応答なのであり、良き行いの基体となるのである。

人間の至福の最初の種子はイエス・キリストであり、人間の救済はすべて、キリストによるものであるとされる。

トマスは、神の永遠的な救いの計画と、人間の時間空間的な運動との有機的な連関から、恩寵と人間の自然本性との関わりを明らかにしていると言えよう。

註

- 1) S. T. II-I, q. 5, a. 7: Utrum requirantur aliqua opera bona ad hoc quod homo beatitudinem consequatur a Deo.
- 2) S. T. II-I, q. 5, a. 7, c.
意志の正しさの必要性については、トマスは、先行する第4問題第4項において既に論じており、ここではその結論を再び確認していることになる。
- 3) トマスは、至福を獲得するための態勢を「意志の正しさ」であるとしているが、この事は、人間の倫理的行為の根本を規定する。即ち、人間の外的行為がその主眼なのではなく、その外的行為の根本にある、意志という内在的行為こそが中心とされるのである。
- 4) S. T. II-I, q. 5, a. 7, c.; *De Caelo* c. 12, 292 a, 22-24.
- 5) *Ibid.* 及び, I, q. 26, a. 3 参照.
- 6) S. T. I, q. 62, a. 3, c.
- 7) S. T. II-I, q. 111, a. 1, c.
- 8) 人間の創造における恩寵については、更なる研究が必要である。ここでは、『ソマ』における、この用語の違いを指摘するに留めておきたい。
- 9) S. T. II-I, q. 5, a. 1, c. 参照.
- 10) S. T. I, q. 62, a. 5, ad 1.
- 11) S. T. II-I, q. 4, a. 4 参照.
- 12) S. T. II-I, prologus 参照.
- 13) S. T. II-I, q. 5, a. 7, c. 及び, S. T. II-II, q. 5, a. 1, c. 参照.
- 14) S. T. II-I, q. 3, a. 1, c. 参照.
- 15) S. T. II-I, q. 6, a. 1, ad 3 及び, I, q. 83, a. 1, ad 3 参照.
- 16) S. T. I, q. 64, a. 3, ad 3 参照.
- 17) S. T. I, q. 73, a. 1, ad 1.
- 18) S. T. II-I, q. 5, a. 7, ad 2 参照.
- 19) *Ibid.* 参照.
- 20) *Ibid.* 参照.
- 21) S. T. III, q. 68, a. 1, ad 1.
- 22) S. T. II-I, q. 5, a. 7, ad 3 参照.